いま注目される伝承遊び

©佐藤裕昭

近年、総合学習の授業で、近隣のお年寄りを招いて、伝承遊び、特に、けん玉やお手玉、こまなどの伝統玩具を使った遊びを通じた交流を行う小学校が増えています。教育現場で子どもたちの「遊び」が積極的に取り入れられるようになった背景には、子どもたちを取り巻く環境の変化があります。

子どもたちを取り巻く環境の変化

子どもの遊びは、この二十年で大きく変わりました。1983年に任天堂からファミコンが発売されると、たちまちブームになりました。その後、携帯できるデジタルゲーム器が次々に発売され、パソコンや携帯電話が子どもたちの間にも広がってきています。

Benesse 教育研究開発センターの調査＊によると、小学生が放課後テレビゲームで遊ぶ時間は平均で約1時間。ほとんどしない小学生が2割強いる一方で、2時間以上する小学生も2割強います。テレビゲームだけでなく、デジタルゲーム全体だと、この数字はもっと多くなるでしょう。遊び場所では、自分の家あるいは友達の家がともに6割以上です。

遊び場所が屋外から屋内に移ったのは、テレビやデジタルゲームの影響だけではありません。子どもをねらった犯罪の増加や街の開発などによって、子どもたちが安心して遊べる場所が少なくなったことも挙げられます。さらに、核家族化が進んだことによる世代間のコミュニケーションの減少、地域コミュニティの弱体化なども見られます。

このような子どもたちを取り巻く環境の変化に対して危機感が高まっています。戸外で身体を使った遊びが減ったことによる、子どもたちの身体能力や体力の低下、また、一人遊びが多くなったことによるコミュニケーション力の低下などはよく指摘されるところです。

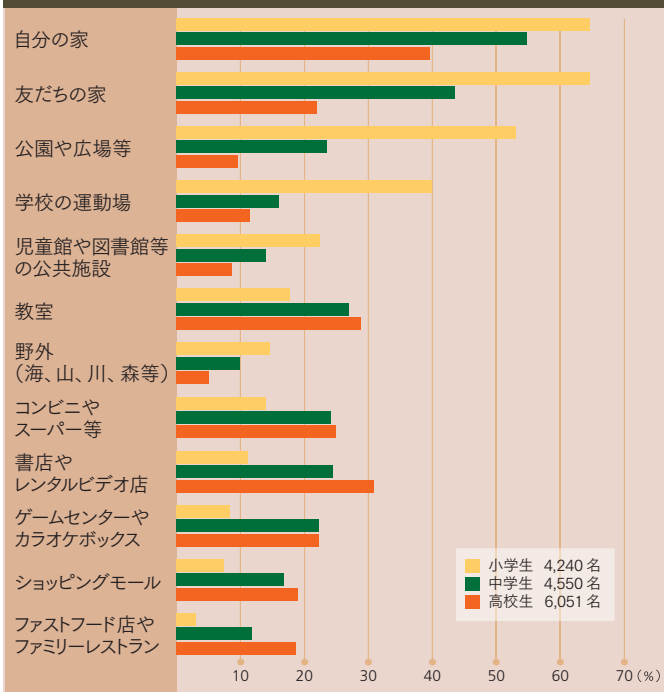
伝承遊びのよさ

伝承遊びには、身体を使った遊びが多くあります。遊びの中で知らず知らずのうちに、身体能力が鍛えられたり、根気や集中力が培われたり、バランス感覚が養われたりします。例えば、けん玉は一見手先だけを使っているようですが、実はひざの屈伸を使い、全身でバランスを上手くとらなければできません。こま回しも、硬くひもを巻きつけたコマを投げて回したり、それを手のひらに乗せたりするには、じっくり長い時間をかけて取り組まなければいけません。

また、伝承遊びは世代を超えていっしょにできるので、世代間の交流を図ったり、近隣のお年寄りを招くことで地域の交流を図ったりすることもできます。いろいろな人たちと交流する機会をつくることが、学校で伝承遊びを取り入れる大きなねらいの一つなのです。

子どもたちが安心して遊べる場所や機会をつくるために多くの自治体で行われている居場所づくりプロジェクトでも伝承遊びが行われたり、地域のコミュニティでも伝承遊びのイベントが開催されたりするなどしています。しかし、これらは裏を返せば、伝承遊びが今や、普段の遊びではないということを意味しています。伝承遊びは、もともと祖父母から子どもや孫に伝わっていったものです。しかし、核家族化が進み、さまざまな玩具が巷間にあふれる現代において、伝承遊びは、伝承されにくくなっているのです。それでも、そういった昔ながらの素朴な伝統玩具に触れて、デジタルゲームにはない面白さに引き込まれる子どもも少なくありません。

放課後、日本の子どもはどこで遊ぶ？



＊『第1回子ども生活実態基本調査報告書』（2005年7月刊行）

世界に共通の伝承遊び

けん玉、こま、お手玉、竹馬、凧揚げ、あやとりなど、日本の伝承遊びとして紹介されることが多いので、多くの子どもたちは日本特有のものだと思っています。しかし、同じような玩具・遊びは世界各地で見られます。どこかで生まれ、各地に伝わっていったものもあれば、偶然同じような遊びが生まれた場合もあるでしょう。身近な材料を使って作られた子どもの玩具が、その材料は違っていても、世界各地で同じようなものであっても不思議ではないでしょう。同じようでいて、それぞれの地域で少しずつ異なる伝統玩具。世界の玩具を比べてみるのもまたおもしろいでしょう。

けん玉

けん玉は、大皿、中皿、小皿に玉を乗せたり、けん先に玉をさしたりして遊びます。最初は、大皿に乗せることから始めます。中皿・小皿に乗せ、けん先に玉をさすことができれば基本はマスターしたことになります。あとは、それぞれを組み合わせていろいろな技をやっていきます。オリジナルの技を作る人も多く、技の種類は1,000以上あるといわれています。

けん玉のルーツは、フランスのビルボケにあるといわれています。19世紀にはフランスをはじめヨーロッパで盛んに行われていたようです。フランスでは、貴族の大人の遊びとして、イギリスでは、女の子の遊びとして行われていたといわれています。

日本には、けん玉は江戸時代(1603-1867)に中国から長崎に伝わったといわれています。この当時は、まっすぐな棒と玉が組み合わされたものだったようです。大正時代(1912-1926)に、広島で、現在のような、三つの皿と剣先と玉からなるけん玉が考案されました。このけん玉は子どもたちの間でブームになり、昭和(1926-1989)初期まで盛んに遊ばれていました。

1975年に設立された日本けん玉協会では、けん玉をスポーツとして普及させるために、競技用けん玉の規格の統一(公認シールが貼られているものが大会などでは使われる)、ルールづくりなどを行いました。現在では、全国各地で、大会が開かれたり、級や段位の認定会が行われたりしています(級は10級から1級まで。段位は初段から6段までが設定されています)。

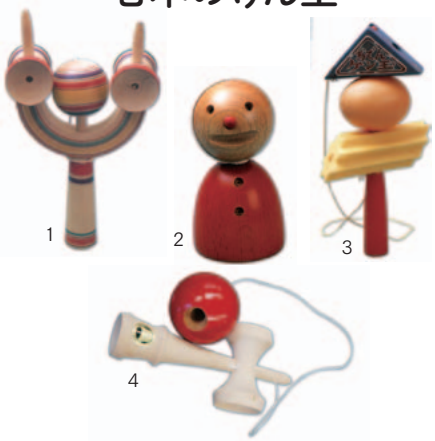
文部科学省も、子どもの体力向上のために身近な遊びに注目しています。けん玉は、バランス感覚が必要で、腰やひざなどの全身運動になることから、2007年度から、けん玉などに詳しい人たちで結成された「キャラバン隊」が小学校を巡回することになっています。

日本けん玉協会 http://www.kendamakyokai.com/

毎年夏に全国日本少年少女けん玉道選手権大会が開かれる。
全国10地区から選ばれた男女各1人がコンテストで技を競う。

世界のけん玉

日本のけん玉



4以外の写真は『けん玉』(監修:NPO法人日本けん玉協会、文:丸石照機、鈴木一郎、千葉雄司/文溪堂発行
©NPO法人日本けん玉協会、丸石照機、鈴木一郎、千葉雄司)

竹馬

竹馬は、1～2m の竹に横木を固定したものを2本用意し、横木に、足を乗せて、竹を持って歩く遊びです。竹馬ということばの起源は、中国の古い遊びで、笹竹を馬に見立てて乗る遊びだったと言われています。日本で現在の形の竹馬が一般的になったのは、江戸時代以降と考えられています。

現在では、プラスチック製の竹馬が主流ですが、竹馬はバランス感覚を養うのにいいとされ、一輪車などと並び、小学校や児童館での遊具として取り入れられています。なかには、祖父、父親、子どもの三代で竹を切って竹馬を作るところから始め、授業でも子ども同士で教えあい、徒競走もリレーもすべての競技を竹馬に乗って行う竹馬運動会を行った小学校もあります。

独楽（こま）/ベイゴマ

こまには実にさまざまな種類があります。指先で回す「ひねりごま」、両手で回す「手もみごま」、巻きつけたひもを引き抜いて回す「糸引きごま」、ひもを巻きつけたコマを投げて回す「投げごま」などです。伝承遊びとしてよく紹介されるのは、中でも投げゴマです。ひもを硬く巻きつけたこまを投げて回します。投げゴマには、木でできたものや鉄でできたベイゴマなどがあります。

ベイゴマは心棒のない鉄製のコマです。長さ60センチほどのひもを巻いて放り投げるようにして回します。樽の上にシートをかぶせて、真ん中をへこませ、その上で2人がそれぞれベイコマを回し、相手のベイコマに当ててはじき出したほうが勝ちです。心棒がないので、ひもを強く巻くのは難しく、うまく回せるようになるにはかなりの習熟が必要です。

こまは中国から伝わったといわれていますが、詳しいことはわかっていません。鎌倉時代（1192-1333）には庶民の間でもはやっていたようですが、非常に盛んに遊ばれたのは江戸時代のことです。よく知られているのがばい貝に砂や鉛を詰めて蝋でふさいだ貝こま（ばいごま）です。これがベイゴマの始まりです。現在のような鉄を型に流し込んで作られる鉄製のベイゴマは、明治の末から大正の中ごろにかけて作られはじめました。大正の末から昭和のはじめにかけて、プロ野球選手や力士の名前を刻んだベイゴマは、東京の下町の子どもたちの間で大流行しました。戦時中は金属を供出しなくてはならなかったため、鉄ではなく、陶器やガラス製のベイゴマが作られ遊ばれていました。

東京の下町のお祭りで、ベイゴマを楽しむ人たち

戦後、昭和20年から30年代後半にかけてベイゴマは子どもたちの遊びの主流でした。製造工場も多くありましたが、現在では埼玉県川口市に一軒残るだけとなっています。それでも、今なお、ベイゴマのファンは多く、毎週のように各地で大小の大会が公園などで開かれています。

人名や地名が
彫られたベーゴマ。

2006年、全日本独楽回しの会が開催した第7回全日本独楽回し大会。

©独楽の里

全日本独楽回しの会
http://www.komav7.com/jsta/jsta.htm

日本独楽博物館
http://www.wa.commufa.jp/~koma/

日本ベイゴマ協会
http://www.bekkoame.ne.jp/ha/asobi/osasoi.html

日本こままわし普及協会
http://yantya.yokochou.com/

日本の独楽

©独楽の里

曲独楽

こまには、子どもたちの遊び道具以外にも、曲芸用のこまもあります。このこまは形や色がとても美しいものです。このこまを使って、さまざまな技を観客に見せます。例えば、刀の刃の上をすべるように独楽を回したり、細い糸の上を綱渡りのように独楽を移動させたり、扇子の上で独楽を回したりするのです（写真は三増紋也氏の曲芸）。お正月やお祝い事など、めでたい席で披露されることの多い芸能です。これらの技を習得するには何年もかかります。

現代版の伝統玩具

伝統玩具のなかには、玩具メーカーによって現代の子どもたち向けに作り変えられ売り出されたものがあります。例えば、ベイゴマをモチーフにした「ベイブレード」、デジタル化されて光が点滅したり楽器音が鳴るけん玉「デジケン」などです。

いずれも共通しているのは、従来の玩具に比べ、習得にかかる時間が少なく、誰にでもすぐに楽しめる点です。例えば、ベイブレードは専用機にコマを取り付けて回すので、誰にでも簡単に回せます。また、漫画、ゲーム、テレビでのアニメなどとタイアップすることが多いのも特徴です。1999年に発売されたベイブレードは、マンガ雑誌にベイブレードで遊ぶ少年たちを主人公にした漫画が掲載され、テレビアニメが放映されたことで、人気に火がつきました。全国大会が開催されたりするなど大流行し、2001年度の上半期だけで1500万個以上が売れました。

デジケン
『けん玉』（監修：NPO法人日本けん玉協会、文：丸石照機、鈴木一郎、千葉雄司 / 文溪堂発行
©NPO法人日本けん玉協会、丸石照機、鈴木一郎、千葉雄司）より。
©1998TOMY

ベイブレード（右）
©HUDSONSOFT/TAKARA・ベイブレードプロジェクト・テレビ東京

しかし、このような現代版伝統玩具の人気は一過性のもので定着することはなく、ベイブレードもデジケンも今は発売されていません。一方、ベイブレードが流行したことで、昔ながらのベイゴマが見直され、ベイゴマ人口は増えました。時間をかけずに誰でも手軽に楽しめることが人気の理由のひとつだった現代版伝統玩具ですが、結果的には、時間をかけて技術をマスターする喜びを味わえる伝統玩具の良さを見直すきっかけとなったようです。

お手玉

お手玉は、小豆、米などを小さな布袋に入れたもので、いくつかのお手玉を歌に合わせて放り投げたり、取ったりして遊びます。地域によって、さまざまな呼び方、中に入れるものや形、遊び方があります。

原型は、BC1200頃の、黒海周辺の遊牧民の遊びだといわれています。シルクロードを経て世界各地に広がりました。

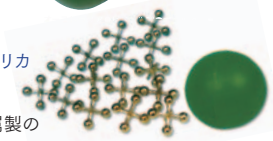
日本では、1200年前頃から女の子の遊びとして親しまれ、母から娘へと伝承されていましたが、1970年頃から普段あまり見られなくなりました。最近は、玩具ではなく飾り用のお手玉をよく目にします。

日本のお手玉の会 http://www.shikoku.ne.jp/otedama/

世界のお手玉

オーストラリア
ビニール製。中には粟のような鳥の餌が入っている。

フランス
羊のくるぶしの骨を使っているお手玉



アメリカ
金属製のジャックとよばれるものとプラスチックのボール。

プエルトリコ
毛糸で編んだもの。中には鳥の餌が入っている。

日本のお手玉

写真：『お手玉』（監修：日本のお手玉の会、文：大西伝一郎 / 文溪堂発行 / © 日本のお手玉の会、大西伝一郎）より。

けん玉で広がった人との出会い

たりお

大学3年。広島県在住。

はじめまして、たりおです。ぼくが所属しているけん玉同好会「DAMA けん」では、地元の子どもたちにけん玉を教えたり、イベントでけん玉の技を披露したりするほか、年に 1 回、モンゴルにけん玉交流に出かけます。ぼくは昨年代表を務めました。

ぼくがけん玉を始めたのは、大学に入ってからです。仲良くなった友達がたまたまけん玉が上手だったこともあって、気づいたら DAMA けんに入っていました。それまでは、けん玉にさわったことすらありませんでした。DAMA けんでは、依頼を受けて、地元の小学校や児童館、老人会や老人ホーム、国際交流のイベントなどでけん玉を教えたり、技を披露したりしています。そういった活動が年間 100 回ぐらいになります。訪れる先々で、たくさんの人たちが喜んでくれます。できなかった技ができたとき、子どもたちが「できた!」と目を輝かせて喜びます。そんな子どもたちの姿を見ると、自分が人の役に立っていることを実感できるんです。

モンゴルでの交流

DAMA けんでは、2002 年から毎年春休みに、知り合いからもらったけん玉を 300 本ほどもってモンゴルに行って、交流を行っています。実はモンゴルでは、けん玉はかなり知られています。けん玉協会もあります。DAMA けん以外にも、モンゴルでけん玉の交流を行っている人やグループがけっこうあるんです。DAMA けんがモンゴルに行くようになったのも、10 年ほど前からモンゴルでけん玉を教えている人に紹介されたからなんです。

ぼくは去年と今年の 2 回行きました。モンゴルのことばは全然わかりません。でも、けん玉をもっていると、「お前、けん玉できるのか? 見せてくれ」と向こうから話しかけてきて、すぐに交流が始まります。今年は、ウランバートル[1]に約 2 週間、ホブド[2]に約 1 週間滞在しました。ウランバートルとホブドを拠点にして、近隣の町の主に小学校や中学校を訪ねました。20 ヵ所以上で開いたけん玉教室や大会に、2,000 人以上が来てくれました。毎年行っているところもあるので、懐かしい顔もたくさんあります。1 年ぶりに会うと、あいさつもそこそこに、「見て見て! この技できる?」と挑戦してくる子がたくさんいます。上手い子にはぼくも勝てません。でも、それもまた嬉しいんです。

モンゴルでは、多くの人たちがぼくたちを手伝ってくれます。今年、ウランバートルでは、有名な馬頭琴奏者の方の家に DAMA けんのメンバーみんなを泊めてもらいました。その方が弾いてくれた馬頭琴は、今までに聞いたこともないような美しい音色でした。また、毎年、日本語を勉強している大学生が車を出してくれたり、通訳してくれたりして、ぼくたちの世話をしてくれます。初めてモンゴルに行ったとき、いつも手伝ってくれる大学生の一人、ゾリゴーが言った「君たちはいいことをしているから、ぼくも手伝っている。それはわかっ

モンゴルの人たちにけん玉を贈呈。 ©DAMAけん

モンゴルの子どもたちにけん玉を教える。 ©DAMAけん

大学祭で開いたけん玉コーナー。全く初めて見る人もいれば、似たような遊びをしたことがある人もいる。 ©DAMAけん

地元の小学校の教室で。授業の一環として依頼されることもある。 ©DAMAけん

ていてほしい」ということばに考えさせられました。手伝ってくれる人、応援してくれる人がいるということは、その人たちの期待に応えなければならないということで、いい加減なことはできない、責任と自覚をもって行動しなければならないと強く思ったのです。

新しい自分を発見

DAMAけんに入るまで、子どもたちと遊ぶのは苦手でした。でも、けん玉をもっていると、すんなり子どもたちの中に入っていけるんです。子どもたちと遊ぶのを楽しんでいる新しい自分を発見しました。

それから、以前はプレッシャーに弱かったり、気が弱いところがあったりしたのですが、人前で話したり技を見せたりする機会が多いことと、昨年一年間、DAMAけんの代表をやったこともあって、少し強くなりました。最初の頃は、緊張して技を失敗したりすると、あせって余計できなくなったりということがありました。でも、場数を踏むにつれて、技を失敗したとしてもあせらないでできるようになりました。また、子どもたちの表情や様子を見ながら、休憩を入れたり、自分が技を見せて集中させたり、そういったことを臨機応変にできるようになりました。それがまた自信につながっていきました。

1 モンゴル共和国の首都。標高約1,300メートルに位置する。人口は約100万人。

2 ウランバートルから西へ1425km。飛行機で3時間、車では2泊3日。面積76100平方キロメートル、北海道と同じくらい。南は中国に接している。気温は最高38℃、最低−43℃。人口9万人。家畜約132万頭。

けん玉の魅力

けん玉のサークルに入っていると言うと、高校時代の友達からは「は〜？　何やってんの〜？」と呆れられることが多くて、最初は、大学生にもなってけん玉をやっているのがちょっと恥ずかしい気持ちもありましたが、今はもう全くないです。友達に言われても、「お前もやってみるか！」と言い返します。

けん玉の魅力は何といっても、やる人を選ばないことです。年齢も性別も関係ないし、運動神経がいい、悪いも関係ない。足が速い人が上手いわけでもない。誰でもできるんです。人によって上手い下手はあるけれど、誰にも平等だと思います。やればやっただけ上手になるんです。練習していると、できなかったことがある日突然できるようになるんです。そのときは、単純に嬉しいです。できたというのがはっきりわかるので、達成感を得やすいんです。それもけん玉の魅力です。

子どもたちにもデジタルゲームよりもけん玉をやってほしいなあと思います。ぼくは小さいころ、ゲーム少年でした。デジタルゲームだと、限られた人数でしか遊べないので、楽しくないし、広がりがないと思うんです。けん玉だとひとりでもできるし、技を見せ合ったり、勝負したりして、何人でもできるから、広がりがあります。

今後の目標

DAMAけんの目標は、大学の地元であるこの地域でもっともっとけん玉を普及させることです。けん玉は継続しないと上手にならないので、今年から、「DAMA道場」を開きました。公民館の一室を借りて、月に2回教えています。今は、15、6人が通っています。

子どもからお年寄りまで楽しめるけん玉がもっともっと広まればいいなあと思います。